

計 三百二十一余人

この隊は同月二十五日、柏崎に到着した。八月二十八日に越後総督府の指揮下に若狭隊は編入された。その作戦に従い、若狭みずからが小隊を率いて米沢口に進み、他の一小隊は春日又兵衛が率いて津川口から会津をめざした。津川口で春日隊はまた二分隊に分けられ、一隊は野沢口に、他の一隊は滝谷を通って坂瀬川を進み、米沢村、雀林村、寺崎村を経て、交戦しつつ会津高田まで進攻、その時点で止戦となった（十月七日）。そして、京都帰還は十一月九日であった（友右孝之前掲書参照）。

#### 第四節 豊津藩の成立

##### 版籍奉還

明治二年（一八六九）六月に薩長土肥の四藩主が版籍を奉還する形をとり、諸藩もこれにならい、朝廷はこれを許可した。旧藩主は新政府から知藩事に任命された。

長州藩は、第二次長征戦争に占領した企救郡を本来の領地とともに朝廷に返還した。そこで、香春（小倉）藩は新政府に対して企救郡の返還を願い出たが実現しなかった。そのかわり、企救郡の年貢収納分を政府の国庫から下げ渡すことを通達してきたが、香春藩はこれを辞退した。企救郡は、結局日田県の管轄にすることを決定した。しかし、版籍奉還後も日田県の実質

的移管はなされず、依然として長州藩が管轄していた。そうした中で、明治二年に企救郡の百姓一揆が発生した。

明治三年（一八七〇）、長州藩は企救郡から引き揚げ、同郡は日田県の管轄になった。

##### 豊津藩の成立

明治元年（一八六八）十一月に藩庁を仲津郡錦原に移転することが決定され、翌年の春から同地での藩庁建設が行われ、冬には藩主の館が完成して、十一月二十八日に田川郡の正福寺から十代藩主小笠原忠忱が転居した。

翌明治三年「公廨御上棟」（坂本家文書「仮題」年代記）した豊津藩の成立である。前年の明治二年は、その前年の秋の収納が不作であったこともあり、領内で食糧が不足がちであったから、蔵米を放出したり、会計局の中原嘉左右（小倉城下町商人・藩御用達・飛脚問屋）に命じて食糧の確保にあたらせた。中原は、肥後・長崎・下関などから食糧を確保して、同二年の不作に対応した。

この年の不作は、天候不順によるものであった。

記録には次のように記されている。

一、同年（明治二年）五月十七日より雨天打続き八月十一日まで降り続き、同月十五日晴天に相成り、九月十六日皆（快）晴同夜中大雨、翌十七日より晴天打続き十月三日まで四十三日皆（快）晴打続き、近年珍敷き不順天氣に御座候事尤も十月四日雨天に候事（前掲坂本家文書）

このように、麦の収穫期から田植え時期及び稲の成長期には長期にわたる雨模様となっていることがわかる。大変な不作の年であったことが想像される。

豊津は最初、難行原と呼ばれた原野であったが、天保年間は錦原とよばれた開墾地であった。藩庁移転時に、豊津と改称された。豊津に移転した小倉藩は、人心一新して対長州戦以来の疲弊から立て直しをしようと決意にあふれていた。アメリカ人を雇って蒸気船の操縦と機関についての技術講習をはじめた。また、家臣から抜擢された建野郷蔵や山田寅吉を二年間イギリスに留学させた。財政難のなかにも軍備拡張も怠らなかつた。明治三年に政府に届け出た所有兵器は、アームストロング砲三门・大砲六四門、外国製小銃三九〇挺余を有していたほどである。急速に近代兵器の整備を進めた状況がわかる。

農村政策は、依然として生活全般にわたって規制を続けて再建にいそしんだ。こうして、明治四年（一八七二）七月に廃藩置県が行われた。